

城下町探訪 1 1  
2009 / 6 / 1 1

## 東門馬出し跡

城内外をつなぐ接点にあるのが門です。堀や土堀で区分されていた城の郭内と郭外が、接続する場所です。平時は通用のためのものですが、いったん事があるとそこは攻防の重要な地点になるので、防御の備えがしっかりとされていました。

松本城では出入り口が本丸に2ヶ所、二の丸に3ヶ所、三の丸に5ヶ所ありました。それらには、<sup>ますがた</sup>枅形と呼ばれる構造を持つものと、<sup>うまだ</sup>馬出しと呼ばれる構造を持つものがありました。

三の丸にあった5ヶ所の出入り口は、枅形を備えるものが1ヶ所で他の4ヶ所は馬出しを備えるものです。馬出しを持つ出入り口は、東門馬出し、北門馬出し、西<sup>あかずのもん</sup>不明門馬出し、北不明門馬出しです。不明門はその名のとおり日常は開けずつかわない門でした。

### ◎ 東門馬出し

現在地は、大手4丁目9番から10番と11番にかけての地籍です。往時の姿をとどめてはいるものはありません。



東門馬出しの様子

(「享保13年秋改松本城下絵図」)



東門から土橋があったあたり

東門馬出しは三の丸にある馬出しのうちで規模が最大のもので、東門がありその東には堀を渡る土橋が延び、その先が馬出しになっていました。

門は<sup>やぐら</sup>櫓門で3間(約5<sup>間</sup>40<sup>寸</sup>)×6間4尺の規模、門の内側は18間程度に15間程度の台形の広場が設けられ、南側には門の脇に番所がおかれ井戸もありました。水野時代は、この番所に鉄砲10挺、長柄の槍5本、突く棒、さすまた、ひねり、<sup>あんどん</sup>行灯2個が備えられていました。土橋は幅6間で長さが18間ありました。

その先の馬出し部分は、郭の広さが約436坪(1.440<sup>坪</sup>)あり、この広さは5つの馬出しのなかでも最大の規模でした。これはこの馬出しが最重要の馬出しであったことを物語っています。郭の正面は土が盛られ、外部から容易に中を見通すことができないようになっていました。その先は堀が張り出す形になって最前面を防御してました。郭の中にも井戸がありました。東門の井戸の水は冷水であったと『<sup>しんぶとうき</sup>信府統記』

には記されています。

郭からの出入り口は南北の地点に設けられ、北は堀を板橋で渡り、南は土橋で渡るようになっていました。そこも防備のため、通路は郭内に一直線では入ることができないように曲がっていました。

馬出しには、設けられる場所によって郭の外に出っ張る形（草）内側に抱え込む形（真）があり、その形状から角ばっているもの（角馬出し）と丸味のあるもの（丸馬出し）がありました。東門馬出しは、外にでっぱりまた角ばっているもので、「草の角馬出し」と呼ばれる部類に属しています。

東門付近には「上土<sup>あげつち</sup>」の地名がありますが、この名は東門馬出しを造るときに掘り上げた土に由来すると伝えられ、古地図には「揚土」とも書かれています。また、松本の町名として「上馬出し」「下馬出し<sup>しも</sup>」の名が残っています。東門馬出し関係するのは「下馬出し」で、北側の木橋を渡って東へ進み東町の通りに入る道の名称です。

上・下馬出しとも東町へ接続しているところから、東町筋を使つての交通が重要視されていたことがわかります。藩主の参勤交代も当初保福寺峠<sup>ほふくじ</sup>越えを使つていましたから、東町を北へ上がっていったわけです。

東門は、三の丸内に町人たちが御用で入る場合、通用門にもなりました。

文政初年に写された絵図には、木橋を渡って東へ向かう通りの北側には「鑪場<sup>かりば</sup>」の表示があります。

明治になって東門馬出しは埋め立てられその跡を今に伝えるものはありません。多少その名残をとどめているものとして、先にふれた馬出しを町名に残していることやお菓子屋さんが「東門」を屋号につけていたりすることなどがあります。



上土にある東門馬出しの碑



下馬出しの通りと標柱